

## 降誕節第4主日礼拝 説教 「御国とこの世での間で」 要旨

日本キリスト教団藤沢教会 2021年1月17日

### エゼキエル書 2章1節～3章4節 マタイによる福音書 4章18～25節

教会関係者の皆様にはすでにお伝えしましたように、「緊急事態宣言」の発出に伴い、私たち藤沢教会は、本日より主日礼拝の非公開、早朝礼拝、夕礼拝の休止を決定いたしました。期間は、「緊急事態宣言」が解除され、再開可能と判断されるまで、ということですが、そこで、長期化が予想される中で皆さんに申し上げたいことは、私たちがこれまで聞いてきたことのすべては、すべて「私たち」という視点をもって語られるものであったということです。ですから、しばらくの間、この「私たち」ということを常に意識しながら、それが難しければ、せめて、主日の10時半だけでも、聖書の御言葉が「私たち」と語る一人一人であることを思い出していただきたいと思うのです。

これまで、私たちは主日毎に会うことが当たり前でした。ところが、その私たちが、会いたい人、そこにいるのが当たり前の人と、当面の間、会うことができず、こうした状況が長期化すれば、「私たち」という感覚は薄められ、やがては消滅してしまうことにもなるでしょう。しかし、そのことを憂慮して、このようなことを申し上げているわけではありません。そもそものところで言えば、こうして信仰が与えられている私たちの関係性はいつの間にか消えてなくなってしまうものではないからです。なぜなら、洗礼を受け、信仰へと導かれた「私たち」は、この信仰ゆえに、どこまでも「私たち」であり続けるからです。今日、この点を先ず確認したいと思ったのはそれゆえのことでもあります。またそれは、この「私たち」であるところに、聖書の御言葉の語る恵みがあり、さらには、この恵みゆえに、私たちは幸いな歩みを進めることができるからです。では、この「私たち」とはいかなる「私たち」であるのでしょうか。クリスマスシーズンを終えたばかりではありますが、クリスマスシーズン、私たちが繰り返して聞いてきたことは、「主我らと共にいます」ということでした。つまり、主は、あの人とだけ、この人とだけ共にいます。お方ではなく、私たちすべてと共にいてくださるお方であるということです。ですから、「私たち」とは、私たちが考え一緒にいたいと思う人たちとだけ一緒

にいることではありません。イエス様と神様がこうして集めるすべての人々のことを、私たちは「私たち」と呼んでいるのです。従って、この「私たち」というところを離れて、信仰の恵みも、信仰ゆえの幸いも、私たちが与えることはありません。

ただ、私たちの多くは、普段、どこまでこの「私たち」ということを意識して毎日を過ごしているのでしょうか。恐らく、「私たち」という言葉すら使わないことがほとんどなのではないでしょうか。そのため、殊更のように言われると、返って反発したくなる人もいるのですが、しかし、だからこそ、敢えて申し上げたいと思うのです。それは、私たちがこの「私たち」であることへの共感を欠いて、信仰者としてのアイデンティティを保ち続けるはととても難しいことでもあるからです。つまり、自分が何者かが分からなくなってしまうということです。しかし、この日の御言葉を見ても明らかなように、信仰は私たちの問題であると同時に、神様の問題でもあるわけです。だから、自分の力だけですべて何とかしようと思う必要はありません。けれども、神様もイエス様も私たちの言いなりになるお方ではありません。しかし、私たちが自らについて「私たち」と呼ぶ場合には、この「私たち」というものの中には、神様とイエス様も含まれてもいるのです。ですから、この「私たち」という事への共感を欠いたところでは、神様の恵みも、信仰ゆえの幸いも、あるのかないのか分からなくなり、ひいては、信仰者である自分自身のことすら分からなくなってしまうということです。

しかし、だから、そのために、私たちは気持ちを強く持たなければならないということでもありません。気持ちの強い弱いというところで左右されるものが私たちの信仰ではないからです。大切なことは、気持ちが弱かろうが強かろうが、私たちが「私たち」であるところには、神様もイエス様も共にいてくださっているということです。だから、あの方が、この人が、ということにはならないのです。あの人にも、この人にも、主が集めてくださるすべての人が、主と共にいてくださる私たちであり、だから、私たち

はそこで自分が何者かを知ることにもなるのです。つまり、この日、御言葉が語るように、その「私たち」であるからこそ、神様もイエス様も遠ざかることはいとこのことです。それゆえ、信仰は精進神論でもなければ、根性論でもありません。御言葉が私たちについて「神の家」と呼ぶように、家族という私たちの有機的な繋がりを支えるものが私たちの信仰でもあるのです。滋賀って、信仰は理念や利害や気分によって左右されるようなものではありません。そこで必要なことは、ただ一つ、一緒にいることであり、それも、長く一緒にいることとです。私たちが「私たち」というのはそういうことであり、そして、それを一番願っているのは、誰でもない私たちの神様であり、イエス様であるということです。

ですから、弟子たちのこの召命の場面は、そのことを再び私たちに示すものです。それは、イエス様が弟子たちを招くに際して「人間を取る漁師にしよう」と仰っていることから分かります。なぜなら、イエス様のお気持ちの向かう先は、弟子たちだけでなく、すべての人々であるからです。従って、イエス様の生涯の目的は、人と出会うことであり、人を招くことであり、人を愛し抜くことだということです。私たちはそのようにイエス様によって招かれた一人一人であるわけで、それゆえ、イエス様との出会い、その招き、共に生きる中で注がれるその愛に深く感謝することになるのです。ただし、この感謝であります、イエス様にいただいたことへの恩義からではありません。イエス様の愛が変わらないところにその根拠を置くものであり、そして、それが一緒にいるということです。ですから、私たちの感謝はここからあふれ出るものでもあります、ところが、今はどうでしょうか。今はそれほどなくとも、これからはどうでしょうか。今までは当たり前のように人と合うことができました。けれども、当面、そういうわけにはまいりません。そして、このことはまた、人とだけでなく、イエス様についても神様についても同じように感じているところはないのでしょうか。このことはつまり、イエス様の愛が変わらないとするその根拠が揺らいでしまうことにもなりかねないということです。けれども、そうであればこそ、御言葉はまた語るのです。そこに私たちの誤解がある、この弟子たちの召命の出来事と、その直

後にある奇跡的出来事を通して語るのです。

そこで、先ず、御言葉が語ることは、神様の愛と私たち人間の愛には区別があるということとです。イエス様と出会ったばかりの弟子たちは、自らの生業、その家族、財産などをすべて残してイエス様に従ったのですが、その中にはっきりとさせられたことは、愛には区別があるということとでした。そして、弟子たちが選んだものが神様の愛であり、そして、それは、私たちも同じです。弟子たちと同様に、後ろを振り返らずにイエス様に従ったのが私たちだからです。ですから、誤解の原因は、私たちが後になって、つまり、それが今、ということなのかも知れませんが、そのように私たちが後ろを振り返ろうとしているところに誤解の原因があるように思うのです。しかし、私は、そこである一つのことが気になります。それは、振り返るには振り返るなりに理由があるからです。ところが、御言葉は、この大問題については一切時間を割こうとはしないのです。それは、御言葉が冷淡で横着だからではありません。そうではなく、この一切時間を割いていないところにイエス様との出会いとその招きの本質が現されているからです。

イエス様と出会い、招かれた弟子たちは、直ぐにイエス様の愛を知ったのです。そして、それが弟子たちに直ぐに伝わったのは、人と出会い、招き、愛することがイエス様にとっては何よりの喜びでもあったからです。つまり、嫌々でも渋々でもない、もちろん、杓子定規でもなければ、使命感といった力んだものでもない、イエス様の人と出会った喜びがストレートに弟子たちに伝わった、弟子たちが何も取らずにイエス様の招きに従ったのはそれゆえのこととありますが、それは私たちも同じです。ですから、人間を取る漁師になるということは、何人、人を集めたかとか、どれだけ人に理解してもらえたかとか、漁師という職業とその実入りの良さを言おうとしているものではありません。人間を取る漁師とはつまり、イエス様の愛の大きさと、私たちと出会ったイエス様のその喜びの大きさから理解すべきものであり、それゆえ、人間を取る漁師とはつまり、イエス様がそうであるように、人を正しく愛し、人と出会った喜びを素直に人と分かち合える人のことだということです。ですから、信仰の喜びの中で最も大きいものは何かと、もし人に問われれば、それは、人を

正しく愛することであり、愛されているというこの喜びを素直に人と分かち合えることだと、私はそう答えることでしよう。従って、ここで御言葉が、神様の愛と人の愛とを分けているのは、そう難しい話ではありません。イエス様がすべての人にこの愛を与えたがっているというこゝとであり、そして、愛についてイエス様が区別してそれを語っているのは、イエス様に愛されたというこの経験が、信仰の入り口だけの問題ではないからです。

それゆえ、「人間を取る漁師」になるという話は、この世のしがらみを捨てる捨てないといった話ではありません。「私たち」の歩みのすべてはここから始まるということであり、それゆえ、漁師になるならないということにはなりません。この始まりにあることがずっと続いていくところに神様の本心があり、本音があると、御言葉はそう語っているのです。だから、信仰はそれ自体は難しいものではありません。イエス様に正しく愛され、イエス様の喜ぶ姿に触れさえすれば、誰でも直ぐにキリストの弟子になれるということなのです。ですから、私たちはあまり細々としたことに煩わされない方がいいように思います。例えば、家族伝道とか、信仰継承とかいうこともそうです。もちろん、このことは私たちにとってとても大事なことでもありますので、誤解しないようお願いしたいのですが、その上で申し上げますと、御言葉が今日私たちに語りかけるところは、その親兄弟などのすべてを捨てるということなのです。そして、捨て去って後、直ぐにその答えが示されるわけではありません。けれども、この後を辿っていく中で明らかにされることは、イエス様が自分が捨てたはずの親兄弟と再び出会い、私たちの交わりに招かれるということです。このことはつまり、親兄弟の愛よりイエス様の愛の方が優っているということでもあるのでしようが、ただ、それはどちらが上で、どちらが下かという話ではありません。私たち人間の愛は、人を生かすもすれば殺すもする、そういうものなんでしょう。けれども、イエス様の愛は、私たちが生かすも殺すもしないということです。そして、この人を生かすものこそが神様の御心であり、従って、ここで弟子たちがしたことは、この人の命を生かすものにすべてを委ね、お任せしたということです。ですから、こゝとの区別はそれを私たちに教えるためのものであり、それも、ストレートにイエス

様の愛というものはこういうものだよと私たちに教えてくれているのです。

しかし、問題はここからです。単純であればあるほど難しいのが物事の道理というものでもあるのでしよう。そして、それはまた、ただ難しいというだけでなく、単純であるだけにまた道を誤ったときの傷も深く、それゆえ、血を流すことにもなるのです。ですから、後ろを振り返り、人がないない、どこにもない、と騒ぐのは、それゆえのことでもありますが、けれども、私たちが求めるものは、そもそものところでは、振り返ったところには初めからないわけですから、傷つこうとも、血を流そうとも、不可逆的で後戻りできないというところに、神様とイエス様の愛があるのは間違いありません。なぜなら、後戻りできないからこそ、私たちの将来はイエス様によって開かれていくことになるからです。今は笑えないことも、イエス様が共に行きますがゆえに、私たちはやがて笑えるようになるのはそのため、そして、人を生かすものというものは、そもそものところでは、そういうものでもあるのでしよう。ただし、この後ろを振り返らないということは、だから、単純に振り返ることが無意味だと御言葉は語るわけではありません。

そこで、その私たちが前を見て、そこに何が見えてくるのか。それが23節以下に記されていることでもあります。それは、イエス様と共に生きる私たちにとっての課題であり、使命であり、役割です。つまり、イエス様と共にある私たちには、人々に教えるべき課題があり、伝えるべき使命があり、さらには、痛みを負う人々への奉仕という大きな役割があるということです。そして、そうしたものが与えられている理由は、多くの人々が互いに赦し合うことができず、また、自分の欲得のためだけに動きまわるために他者のために労することを厭い、そのため、より良き関係を築けずにいるからです。そして、そこに何も言わずについて行き、一言も発せず、その気配すら感じさせずに、イエス様のなさることをじっとその側で見つめていたのが弟子でありました。それは、それだけ弟子たちが心から安心していただけということでもあります。ですから、ここには、召された直後の弟子たちの初々しい信仰が現れているようにも思います。そして、弟子たちのこの初々しさでありますが、それは、イエス様に向かって、弟子たち

がそれだけ素直にその心を開いていたということなのです。つまり、イエス様のなされることのすべてに弟子たちはときめいたということなのです。それゆえにイエス様のなさることのすべてに弟子たちは合点がいき、従って、愛し合うことも、赦し合うことも、ときめく弟子たちには全てが不思議ではなかったということです。

ですから、イエス様に心を開くということとは、その愛に覆われるということ、自ずと私たちをしてそうさせるものだという事です。しかし、それがいつまでも続かない。長くて半年、短くて三月、課題と使命と役割を担う生活が繰り返す中で、弟子たちも少しずつ地が出てきて、その筆頭弟子であったペトロに至っては、イエス様からサタンとまでいわれる始末であったのです。そして、それは、私たちも同じです。あのとき初々しさはいったいどこに行ってしまったのかと、そう嘆く人は少なくないように思います。ただ、そこでいくら嘆こうとも、あの日に戻れることはありません。それは、私たちの心が汚れてしまったからとも言えるのですが、そこで私たちが考えることはその汚れを取り除くための方法です。そこで、私たちは、与えられた課題、果たすべき使命、担わねばならない役割などをすべて完璧に成ることで汚れを取り除こうと考えるのです。けれども、それすらも長く続かない。初々しさを失った私たちにはよく分かることですが、その私たちが 23 節以下の出来事を見たならば、そこで何を思うのでしょうか。イエス様と出会った直後の初々しい信仰を思い起こし、恥ずかしい気持ちになるに違いありません。そして、その恥ずかしさでありますが、それは、あれもできない、これもできない、ということに止まるものではありません。できない自分を誤魔化して、まるでできているかのような顔をする恥ずかしさです。ですから、弟子たちはこの時の初々しさを思い出して、恐らくは、その恥ずかしさからいたたまれない気持ちにもなっただけです。けれども、その弟子たちがイエス様と出会った直後の出来事をこのように私たちに伝えてくれている、それは、恥を忍んで、ということではなく、自らの恥を深く知ったからです。そして、それをこのように記録に残しているのは、恥を知ることが、恥しいことではなく、イエス様の深い、本当に深い愛を知らされるものであったからです。

ですから、そういう意味で、私たちが「私たち」であるということとは、恥を深く知っているということです。そして、それは同時に、自分を卑下しないということなのです。なぜなら、その私たちが出会い、弟子として招き、愛する喜びを素直に現してくださったのが私たちの主イエス様であるからです。ですから、私たちは、自分の愚かさを嘆く必要はありません。弟子たちがそこで感じた恥ずかしさも、イエス様は拒むことなく引き受けてくださっているからです。そして、イエス様の十字架はそのことを私たちに伝えてくれているものであり、ですから、それが証拠に、この直後に何が語られているのか。それは、イエス様による山上の説教です。そこで、イエス様は語ります。「心の貧しい人々は幸いである。天の国はその人たちのものである」とこう語り始め、生きづらいこの世を信仰をもって生きる幸いをこのように告げ知らせるのです。ですから、エゼキエル書に「『人の子よ、私が与えるこの巻物を胃袋に入れ、腹を満たせ。』私がそれを食べると、それは蜜のように口に甘かった」とあることは強がってのことではありません。「哀歌と、呻きと、嘆き」と語るこの世の有様を、御言葉は甘美なまがい物で誤魔化すことなく、そのままを私たちの口に入れ、そして、それを「甘い」と感じたのは、弟子としての素直な思いでもあるのです。

福音を深く味わい知る「私たち」にとって、神様とイエス様が与えるものこそが人の命を根底から支え、また、生かし、幸いへと導くものでもあるのです。私たちはそのことをこうして御言葉を通し聞いているし、味わっているし、日々経験し続けているのです。つまり、それが「私たち」だということです。それゆえ、この世の生き辛さを見つめつつも、私たちが、主が共にいます私たちである以上、主によって生かされ、支えられている私たちは、イエス様に愛されるにふさわしく共にこれからを歩むことができるのです。ですから、もし、今が辛くて辛くて仕方ないようなことがあれば、この「私たちが私たちである」ところに立ち帰って足下を見つめたいと思うのです。なぜなら、それは、私たちを生かすところに置かれているものが神様の御心であるからです。祈りましょう。